

アジア大学スポーツ交流プロジェクト ～Sports for P.E.A.C.E.～

大橋正春*・滝澤かほる*・山崎健*・五十嵐久人*・篠田邦彦*・小林日出至郎*・八坂剛史*・
牛山幸彦*・森恭*・大庭昌昭*・石垣健二*・村山敏夫*・田中誠二*・笠井直美*・笠巻純一* 1

新潟大学教育学部* 1

教育学部保健体育・スポーツ科学講座は平成22年度に引き続き、「アジア大学スポーツ交流プロジェクト～Sports for P.E.A.C.E.～」を本年度（平成23年度）も実施した。環日本海の3大学、哈爾濱商業大学（中国）、漢陽大学（韓国）、そして新潟大学の学生及び教員によるスポーツ・学術交流イベントの実施による学士能力や教育方法の改善を図るものであり、昨年度構築したインターネット・ビデオ・システム（IVS）を用いスポーツ場面の共有化およびコミュニケーション能力の向上を計った。発足している講座学生による国際交流委員会により、スポーツという共通のツールを通し異文化の理解を深め、スポーツ活動及びスポーツに関する学術的活動また、IVSの構築により環日本海の3大学間での継続的な交流を可能にする基盤作りの継続・発展を図った。

キーワード：スポーツ交流、Sports for PEACE、教育方法の改善、コミュニケーション

スキル、インターネット・ビデオ・システム（IVS）

1. はじめに

本プロジェクトは、新潟という地域性を活かし環日本海における各国の大学におけるスポーツ活動に関する交流を持つとともにそれぞれの国の文化的背景を踏まえ学士力向上、競技力向上、及び学習教育の改善のためスポーツ・学術的な国際交流をおこなうことを狙いとして平成22年度より継続している。また、近年の大学の役割として「地域に開かれた大学」が望まれている中、大学スポーツの競技力や指導力を地域住民に還元し、地域と共に育成するスポーツ活動を展開していく必要がある。こうした活動が、学生の指導力向上や社会性が備わった学生の育成に繋がっていく。しかし、こうした指導には単なるスポーツ経験だけに基づくものでなく、専門課程での教育・研究内容を統合的に活かしていかなければならない。そこで本プロジェクトでは取り組みを通して、各授業科目を統合的に学ぶと同時に、さらにスポーツという共通のプラットフォームで、グローバル化した社会の中での異文化理解を深めていくことにより、学生の学士力向上を目的としたものである。

2. 取り組みの目的及び内容

2.1 取り組みの目的

本プロジェクトの目的は以下の通りである。

- ①大学を中心とした地方社会、地域社会で行っているスポーツ活動についてスポーツを通して交流し諸外国と比較することによるグローバルな視野の育成
- ②教員の人事交流による双方の授業における情報交換や比較検討し魅力ある授業科目の開講を目指す
- ③構築したIVSを利用し映像の共用化を通しIT技術をスポーツ活動へ取り入れる
- ④各国大学の優れた競技力を共有することにより競技力の向上を図る
- ⑤他国言語を用いて異文化交流を実施することによるコミュニケーション能力の向上

2.2 P.E.A.C.E.プロジェクトのビジョン

平成22年度に引き続き学士力の向上と教育改善を狙いとして国際交流委員（学生）によるイベントの開催の計画：Plan、そのことによる困難や人との出会い：Encounter、講座教員による支援：Assist、交流イベントの実施：Carry-out、そしてその評価：

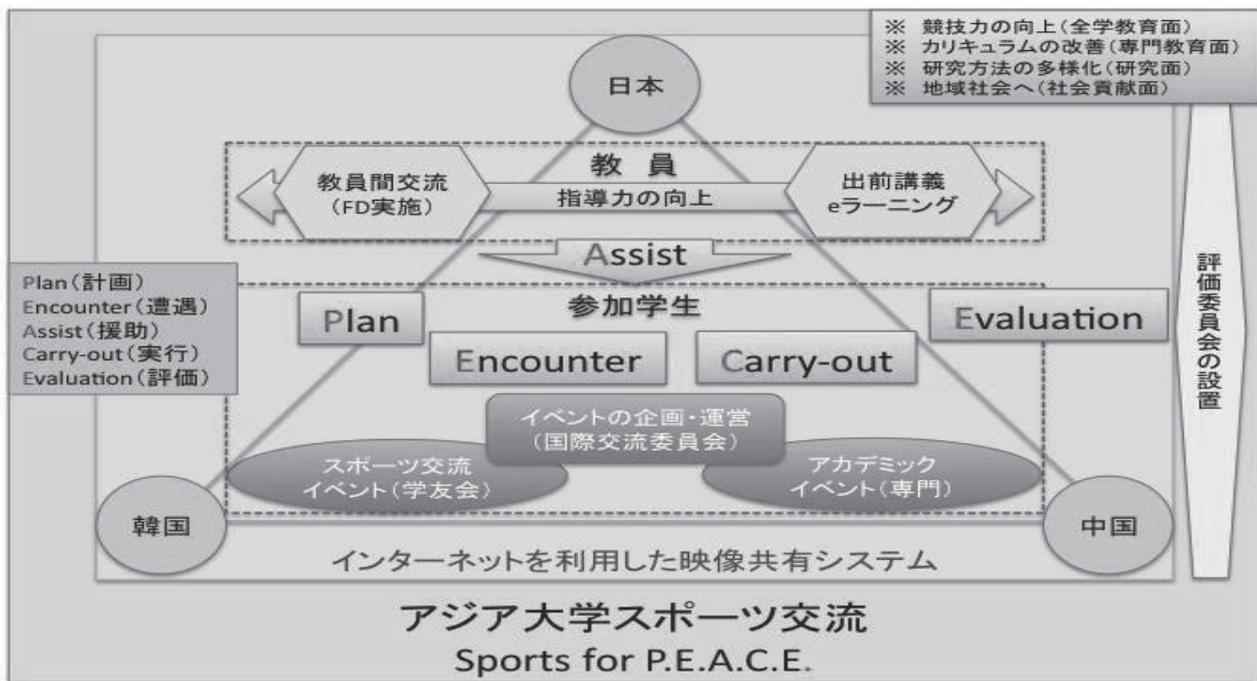


図-1 P.E.A.C.E.プロジェクトの概要

Evaluationの頭文字PEACEをキーワードとして活動を行った。

図-1はP.E.A.C.E.プロジェクトの流れを図示したものであり、本学学生はもとより韓国や中国の参画したメンバーにも本プロジェクトが“P.E.A.C.E.プロジェクト”として浸透した。

2.3 取り組みの具体的内容(平成22~24年)

(1) 平成22年度

具体的な交流大学として、中国の黒竜江省にある哈爾濱商業大学体育学院と韓国のソウルにある漢陽大学体育学部との連携を図ることとした。そのために、本プロジェクト教員2名が先方大学の教員へプロジェクトの趣旨の説明並びに打合せを行った。双方のカリキュラムについての比較検討や授業に関するFD、そしてこれにより魅力ある授業科目の開講を提案した。各種スポーツ活動のうち中国、韓国のそれぞれの大学が得意とする種目についての調査を図ると同時に、3大学間のスポーツ競技大会の可能性を探った。具体的には哈爾濱商業大学では、水泳とテニスが中国国内においてレベルが高い種目であり、卓球は中国全般においてレベルが高い。また、漢陽大学では器械体操における交流を希望している等把握する事ができた。

そして、これらの調査を踏まえた上で体育スポーツ系学生のスポーツ・学術交流を行っていくこととした。このことは競技力向上のみならず、地域住民

へのスポーツ指導をはじめとするサービスの在り方など将来において還元する礎になると考えた。

交流の成果を交換するために、インターネット上に情報交換用の専用サーバーを構築し、テキストメールだけでなく映像を共有できるようにし、双方の教員によるインターネット・ビデオ・システム(IVS)を用いた授業や学生同士のグループワークが可能になるよう、ネットワーク作りを行った。

(2) 平成23年度(今年度)

3大学の連携の確認そして強固なものとするために、3大学の代表者間による連携協議会を実施(5月;漢陽大学)した。昨年度(平成22年度)における成果の検証をもとに、平成23年度および24年度のスポーツイベント開催計画等について協議した。これを受け、今年度は中国の哈爾濱商業大学におけるスポーツ交流イベントの開催を企画・実施した。また、他のスポーツ交流イベントとして、新潟市で開催された「日本・韓国大学生卓球交流戦」の企画・運営を国際交流委員(学生)が中心に行った。

詳細は次項に記す。

(3) 平成24年度以降(次年度～)

平成23年度の代表者会議で既に決定しているように、韓国の漢陽大学で開催する。また、引き続き本学教員による出前授業の実施を積極的に進めることとした。これまでの交流の中で、特に依頼があった内容としては、体操競技やスキーの実技指導が挙

げられている。

また、アジア大学スポーツ交流プロジェクトとして、さらに連携国の拡大としての取組を進めることとした。これまでの調査等で候補となった台湾の大学（国立台湾師範大学）との連携を進めていく予定であり、まずは、本学との二国間での交流を目指すものとした。

2.4 取り組みの評価体制・評価方法

(1) 評価体制

外部委員を含んだ評価委員会を設置する。そのメンバーは、アジア大学スポーツ連盟事務局長（Kenny chow、Hong Kong）、日本オリンピック委員会評議員（早田卓次）、新潟県体育協会会長、新潟市体育協会会長など外部委員と、教育学部長をはじめとする学部教員とする。その他、学友会活動に関連して運動本部長を加える。また、必要に応じて地域のスポーツ愛好家を加えるなどして、地域スポーツへの還元が十分に行われているかについて等、総合的な評価を行っていく。

(2) 評価方法

平成22、23年度の評価は、目標達成度に対する学生への聞き取り調査を中心に実施した。また、参加学生にはポートフォリオの作成を行わせ、スケジュールに従って活動内容を整理していく。平成24年度は、評価委員会に評価のための調査を実施してもらうよう依頼するとともに、これまでの資料も含め、3年間のプロジェクトの成果について評価を実施し、さらなる改善を目指す。

3. 平成23年度における国際交流の実績

3.1 3大学の責任者による連携協議の実施（5月）

韓国の漢陽大学において、各大学の責任者による連携協議会を実施した。平成22年度に新潟で開催したスポーツイベントの成果について検討し、引き続き本プロジェクトを実施することを決定した。開催地についてはローテーションすることとし、平成23年度は哈爾濱商業大学、24年度は漢陽大学とした。また、3大学の連携をより強固なものとするため、教員の交流を積極的に進めることを確認し、教員の出前授業を実施していくこととした。体育・スポーツ系分野での3大学間の連携はより強固なものとなった。

3.2 日本学生卓球連盟との共催による「日本・韓国大学生卓球交流戦」の開催（8月）

このイベントは8月22日～26日、新潟市亀田総合体育館にて開催された。また、それに付随していくつかの事業が実施されその詳細は次の通りであった。

- ① 日韓大学生卓球交流戦の企画・運営
- ② 観戦者参加イベント（チャレンジマッチ）
- ③ 観光（新発田市清水園・月岡温泉・せんべい王国）
- ④ 交流会（ウェルカムパーティー／フェアウェルパーティー）

この交流戦は毎年開催されている「日本・韓国大学生卓球交流戦」を本プロジェクトとの共催で実施したものである。両国の出場選手団は韓国側からはスタッフ4名、選手10名であり、日本選手団はスタッフ6名、日学連選抜選手12名、北信越選抜12名の計30名であった。

国際交流委員会の学生は、国際大会である本交流戦の企画・運営に携わることで、特にスポーツイベント・交流事業におけるマネジメント力についての実践を学んだ。学生は、8つの役割（総括、試合運営、要項担当、観光担当、選手帯同、記録、広報、レセプション）に計34名が参加した。また、学生らは選手同士の試合だけでなく、県内の小・中・高等学校で卓球に取り組む児童・生徒が、代表選手と交流を持てるチャレンジマッチ（観戦者参加イベント）を企画した。そのための広報活動として、ポスターやチラシ、ホームページなどを活用して広く周知し、その結果、当日は県内から約120名を越える児童・生徒ら（大人も含む）が参加し、両国代表選手との対戦を楽しんだ。参加者からは、喜びの声が



図-2 地域のちびっ子によるチャレンジマッチ
多数聞かれ、大盛況のイベントとなった（図-2）。

[資料・報告]

また、選手団に新潟地域の文化を紹介するイベントも企画し、新潟の温泉紹介やせんべい作りなどのプログラムを実施した。こうしたイベントを進める中で、学生はスポーツに係わるイベント・マネジメントを学んだと思われる。

3.3 3大学によるスポーツ交流イベントの開催(8月)

同じ時期に中国の哈爾濱商業大学において、3大学によるスポーツ交流イベントを開催した。開催時期は8月22日～26日であり、この期間の主な事業内容は次の通りであった。

- ① 企画会議 (3大学合同)
- ② 水泳講習会 (理論編)
- ③ 水泳講習会 (実技編)
- ④ 三校教師交流会 (教員)
- ⑤ 合同練習会
- ⑥ 歓迎会
- ⑦ 水泳大会 (3大学合同)
- ⑧ 哈爾濱商業大学キャンパス内見学
- ⑨ 学生による討論会
- ⑩ 送別会

新潟大学から15名(教員2名、国際交流委員会学生6名、水泳部学生7名)、漢陽大学から9名(教員2名、水泳部学生7名)が参加した。哈爾濱商業大学の水泳選手は7名であったが、体育学院の教員約20名、専門課程の学生約50名も本イベントに参加した。

3.3.1 企画会議 (8月22日)

参加した国際交流委員会学生は、哈爾濱商業大学の学生達と連携して、水泳大会及び合同練習会の企画・運営を行った。平成22年度と違い、海外での開催のため、渡航前に何度も先方と連絡を取りながら準備を進め、現地到着後も入念にシミュレーションを重ねた上での開催となった。大会前日には、水泳部学生間による合同練習会を開催した。

3.3.2 水泳講習会(理論・実技編) (8月23日)

新潟大学大庭准教授による水泳講習会が開催された。(午前：理論講習会、午後：実技講習会) 哈爾濱商業大学のスポーツ専門学生に対して「水泳の初心者指導法」をテーマとして実施した。中国では、伝統的に訓練的指導が大半であり、科学的な知見に基づいた系統的な指導方法論について講習の依頼がありこのような

テーマとした。講義には専門課程の学生約50名が、実技指導では実際に初心者・初級者学生20名が参加して行われた(図-3)。



図-3 本学 大庭准教授による実技指導

3.3.3 教員交流会 (8月23日)

3大学間の教員交流会がキャンパス内会議室にて実施された(15:30～17:30)。陳徳有 哈爾濱商業大学体育学院長の歓迎の挨拶後、本大学の村山准教授が新潟大学保健体育・スポーツ科学講座のカリキュラムについて説明をした。その後、Kim Don Whan(漢陽大学生活体育部長)より挨拶があり、3大学間でのカリキュラムの将来像についての検討がなされた。

3.3.4 水泳大会 (8月24日)

哈爾濱商業大学屋内プールにて8月24日水泳大会が開催された。大会は、午前の部として男女200m自由形、男子100m平泳ぎ、男女200mメドレーリレーが行われた。また、男女50m背泳ぎ、バタフライ、自由形の競技も実施した。各種目の優勝は漢陽大学と新潟大学が分け合った。午後は男女100m背泳ぎ、自由形、バタフライ、及び男子200m平泳ぎの競技を実施した。新潟大学は男子の部で各種目において好成績をおさめた。

水泳大会の様子は、競技場となるプールにビデオカメラを設置し、インターネットを活用したスポーツ映像システムを利用しリアルタイムで新潟にいる国際交流委員の学生と共有することができた。リアルタイムで新潟と交信し、日本(新潟大学キャンパス)に残った国際交流委員会の学生とも交流が持てたことは、大変大きな成果であった(図-4)。



図-4 IVSシステムで情報を中国・日本で共有している場面

3.3.5 討論会 (アカデミックイベント) (8月25日)

3大学の学生による討論会が、北キャンパスにおいて開催された(図-5)。学生による討論に先立ち、唐宝盛(哈爾濱商業大学体育学院副委員長)より歓迎の挨拶の後、哈爾濱商業大学の紹介が日本及び韓国の学生になされた。引き続き、中国の学生による水泳部活動の紹介があった。また、学生間において討論のテーマを、競技を続けている意義、トレーニングと勉学のバランス、勉学や生活資金について、そして大学入学の制度等についてとした。

討論会では競技を続けている理由について活発な意見交換があり、異文化を知る事により相対的に自分た



図-5 3大学の学生による討論会の様子

ちの置かれている状況を改めて理解することができた

ように思える。また、日中韓の学生達が自分自身の考えを他国言語にて伝えることの難しさ、重要性を痛感しながら、それでも「伝える」ことで他国の学生達を意識の共有が実現したものと捉えられる。

4. 事業の成果及び評価

新潟大学が主体となり、日中韓の3大学間におけるプロジェクト(3か年計画)の基盤を継続して構築することができた。3大学間の教員及び学生の友好関係が深まりつつあることに加え、スポーツイベントを行うことでの競技スポーツの技術向上、イベントの企画力・実行力の向上、IVSの有効利用、3年目以降のプロジェクト継続に関する3大学間の合意等、当初掲げていた目標を概ね達成することができた。最も重要であることは、国際交流に関わってきた学生の意識や意欲の変化にある。プロジェクトに参加した学生の意欲や関心度は不参加であった学生と比較して高い(図-6)。健康スポーツ科学課程においては、スポーツコミュニケーション演習(平成25年度より国際スポーツ関係論演習に名称変更)を開講しており、英語を共通言語にスポーツを通じた国際交流のスキルを高める機会を提供している。これら講義を受講する学生らは特に積極的にプロジェクトへ参加するなど意欲が高い傾向にあり、プロジェクト参加によってより国際交流の面白さを感じたことで語学向上の意欲が高まった。このことは、プロジェクト展開の意図するところであり、成果の一つといえる。

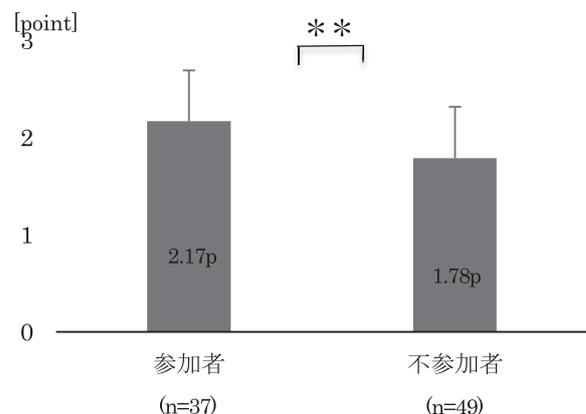


図-6 国際交流への意欲(参加者と不参加者の比較)

また、実行委員として関わった学生らに実施した

意識調査においても、運営委員として関わることが強いほどより関わりを求める高い意欲にあることを集約できた(図-7)。その他の学生と比べて、運営委員という役割によって他国学生との交流がより深かったことを考えると、そこに満足度の高さやより深い関わりを持ちたいという欲求が生まれることも理解できる。さらに、実行委員会には各学年で関わる学生がおり、実行委員長は学部4年生が務める。以下、記録係・アタッシュ(日本滞在期間中の世話係)・通訳・中国及び韓国との連絡係・交通手段手配係などあらゆる担当者が組織的にプロジェクトを遂行した。これら経験こそが学生の意欲を高め、さらに精度を高めていきたいという意識になることを、期間を通じて教員と学生で共通理解を得た。

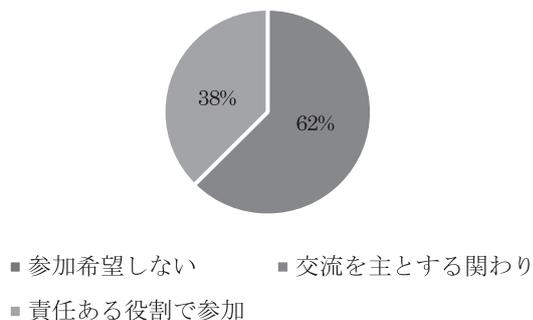


図-7 今後の取り組みへの意欲(実行委員)

5. 平成23年度実績のまとめ

平成23年度における本プロジェクト実施内容をまとめると次のようになった。

- スポーツを通して交流し諸外国と比較することによるグローバルな視野の育成ができた。
- 教員の人事交流による双方の授業における情報交換及び比較検討し魅力ある授業科目の開講を目指す基盤体制が整った。
- 構築した IVS 映像を活用し IT 技術をスポーツ活動へ取り入れる基盤ができた。
- スポーツ競技会を実施した事による各国大学の優れた競技力の共有ができた。
- 異文化交流を実施したことで他国言語によるコミュニケーション活動がなされた。

6. 今後の課題と展望

新潟大学の教員や学生国際交流委員会が韓国、中

国の大学を訪問することで、3大学の相互の交流をさらに深めることができた。平成23年度は、哈爾濱商業大学において日中韓水泳競技会を企画し、本学の水泳部及び講座の国際交流委員会の学生が交流を継続できた。また、日韓大学卓球交流戦では、特に地域住民の方々を取り込んだイベント運営及び企画に参画し、また競技会にも参加することが出来た。

平成24年度もスポーツイベントと並行して、学術交流の充実を図るの必要があり、各大学で行われているスポーツに関する最先端の研究を相互に学習することがそれぞれの大学の研究水準の向上に繋がるものと考え。3大学の教員が各大学を相互に訪問して講義や実技指導にあたることや、これらの講義を各大学のカリキュラムとして位置づけることなどを継続検討する。また、IVSを有効活用した学生間の学術交流の促進等も次年度以降も必要である。

また、3大学間の交流を環日本海の拠点としながら、プロジェクトのテーマでもある、「アジア大学スポーツプロジェクト」へ発展させるために、連携国の拡大に向けた取り組みも必要になってくる。平成24年度において、交流予定の大学として国立台湾師範大学があり、スポーツ・レクレーション学院との連携・交流の可能性について関係教員間による具体的な協議を進める予定である。

謝辞

本プロジェクトを展開するにあたり、とくに新潟で行われた日韓学生卓球大会の際、昨年に引き続き大塚製薬より協賛を戴いたことに深く感謝の意を表します。(敬称略)

2013年11月29日受理

Masaharu Ohashi*, Kahoru Takizawa*, Ken Yamazaki*, Hisato Igarashi*, Kunihiro Shinoda*, Hidesiro Kobayashi*, Takeshi Yasaka*, Yukihiko Ushiyama*, Yasushi Mori*, Masaaki Oba*, Kenji Ishigaki*, Toshio Murayama*, Seiji Tanaka*, Naomi Kasai*, and Junichi Kasamaki* 1:
Faculty of Education, Niigata University 8050, Ikarashi 2no-cho, Niigata City, Niigata, 950-2181 Japan